看護師長の役割課題に焦点を当てた看護情報活用力向上のための教育方法

Educational Method to Improve Nursing Information Utilizing Capability Focused Role Subjects of Head Nurse

伊津美孝子[*1, *2]，真嶋由貴恵[*2]
Takako IZUMI[*1, *2]， Yukie MAJIMA[*2]
[*1] 森ノ宮医療大学
[*1] Morinomiya University of Medical Sciences
[*2] 大阪府立大学大学院工学研究科
[*2] Graduate School of Engineering, Osaka Prefecture University
Email:izumi@morinomiya-u.ac.jp

あらまし：医療の情報化に伴い，看護職の看護情報活用力の向上に資する教育方法の検討が必要となっている．そこで本研究では看護師長の現場の役割課題に着目して，課題解決への行動変容を目的とした 2 回構成のワークショップを開催した．初回は「各自が日々扱っている看護情報の種類とその活用の具体的行動」をテーマに各自の課題を明らかにした．2 回目は，明らかになった自己課題に対して「課題解決の達成状況(行動変容とその内容)」について確認と意見交換を行った．その結果，受講者の看護情報活用力向上への意識と行動変容に効果があったので報告する．

キーワード：看護師長，役割課題，看護情報活用力向上，ワークショップ

1. はじめに

医療現場の IT 化が進み，電子カルテの導入施設は増加し，ベッドサイドにおける各種モニター，機器類も進化していることから，それらを日々取り扱う医療スタッフの情報リテラシーを向上させなければない状況となった．特に，一組織単位を管理する看護師長にとっては喫緊の課題といえる．看護師長は日々，患者や家族，スタッフに関する情報のみならず，多種多様のリアルタイムで集積されたデータを取り扱っており，タイムリーにその中から必要な情報を分析し，看護実践に活かすための情報活用能力を強化していく必要がある．しかし，看護師長の多くが情報教育を受けていない世代であり，ICT 機器への苦手意識や適切な情報収集手段の把握不足があること[(1)]が既に明らかとなっている．

一方，ハイパフォーマー看護師長(以下，ハイパフォーマー)の ICT スキルは高く，主体的に情報活用に取り組んでいるという報告[(2)]もある．しかし，ハイパフォーマーも看護管理の視点から必要な情報とは何か，情報から何を読み取ればよいのかなどを模索していた．また，学習ニーズは非常に高いにもかかわらず，施設内における学習環境や看護管理者の教育システムが十分といえないなど，今後の教育的課題が明らかになった．さらに，一般の看護師長の看護情報活用能力の実態調査[(3), (4)]でも，ハイパフォーマーの教育的課題と同様の結果を得た．

そこで本研究では，看護師長を対象に，現場の役割課題に着目して看護情報活用力向上への行動変容を目的としたワークショップを 2 回開催し，その効果を明らかにすることとした．

2. 方法

Ⅰ病院の看護師長 9 名を対象に平成 26 年 11 月～12 月に，2 回のワークショップを実施した．ワークショップは，2 グループに分けて討議を行い，その内容を付箋に書きこみ，それを模造紙に貼り付け，現場の課題や情報活用能力について分類する作業を行った．

1 回目は,「各自が日々扱っている看護情報の種類とその活用の具体的行動」ついて行い，各自の課題を明らかにした．2 回目は,「自己の課題達成状況(行動変容とその内容)」について行った．

本研究では，この 2 回のワークショップで討議された内容及びワークショップ終了後の感想を質的に分析した．

倫理的配慮については，研究協力施設及び森ノ宮医療大学倫理委員会の承認を得た上で，協力者に研究の主旨，参加への任意性，匿名性,個人情報の守秘性，結果の公表等について文書及び口頭で説明し同意を得た．

3. 結果

3.1 第 1 回ワークショップ

1 回目のワークショップの結果を表 1 に示す．看護師長の年齢 40－59 歳，看護師長経験年数 1 年－14 年であった．ほとんどの看護師長は積極的に具体的行動を起こしていたが，看護必要度が反映されない小児科や産科の師長は，“忙しさ”をどのようにデータとして示せば良いのか，その分析や発信の方法について模索しており，次回に向けた各自の課題を設定していた．

3.2 第 2 回ワークショップ

2 回目のワークショップの結果(表 2),「自己の課題について実際に行動できたか」については，看護師長全員が意識的に行動を起こしていた．看護実践が看護必要度に反映できない小児科の看護師長は，

過去の入院時のデータ収集と分析を行い，インシデントやヒヤリハット報告も積極的に行うようスタッフに促し部署全体で情報共有を行っていた．

表 1　第 1 回ワークショップの結果

各自が日々扱っている看護情報の種類		活用の具体的行動
患者情報	入院時患者情報， データベースの内容確認 HCU の利用率 退院調整 在宅復帰率	その日のうちに申し送り時や全体ミーティングでスタッフへのフィードバック，必要な情報の記入の確認 地域連携室，MSW スタッへ伝達，在宅方向で家人に協力を得る スタッフへの伝達･患者の病床移動，運営会議，朝の師長会での呼びかけ，スタッフの理解を深めるために勉強会の開催
看護情報	看護必要度の記入漏れの確認	スタッフの理解を深めるための勉強会の実施

表 2　第 2 回ワークショップの結果

課題	達成	未達成
病床管理	入院日数を治療と療養対象者を選定 退院支援の声がけを実施	退院支援への意識がスタッフ個々に十分浸透していない現状
医療安全 褥創発生率	インシデント報告，ヒヤリハットを含め，徹底的に報告させた．リンクナースを中心にしたカンファレンスを行い，病棟間(内)で共有	看護の質にかかわるため，この数値を把握しスタッフにフィードバック
HCU 利用率	日々の HCU の利用率を病床管理担当者と関係部署の課長へ報告 HCU への入室該当者基準を，わかりやすく表示(救急外来と医局)	スタッフの利用率や入室基準の理解への浸透が不足
労働情報	小児科の入院を調べ(過去 1 年)，分析し結果を医師や看護部長に提示(人員配置)	有給取得率を算出し，適正評価確認， フィードバック，視覚化，残業時間の内容確認

4.　考察

ワークショップとは,「多様な人たちが主体的に参加し、チームの相互作用を通じて新しい創造と学習を生み出す場[5]」のことである．

ワークショップに参加した看護師長たちからは，「日常の会議と異なった方法はとても新鮮で交流の場があるのはとても良い，普段，他部署の師長とは会議や連携，協力，依頼以外関わらないが，自身の管理の考え方の参考になり情報共有ができた．各自が課題を明らかにした上で実際に行動を起こすことができ,今後の取り組みへの意欲の向上に繋がった」など，ポジティブな思いが述べられていた．

このことから，看護師長たちの業務プロセス改善や現場の問題解決活動など，その役割課題に着目した今回のワークショップは，メンバーに当事者意識を常に持たせ，それぞれの体験を共有させ，主体的な参加と協議へとつながっていったと考えられる．その結果，一人では得られないような気付きや，普段思いつかないような対策が生み出された．さらに成果の報告を行う 2 回目のワークショップを設定したことにより，1 回目で考えた対策は次回開催までの個々の目標設定となり，行動変容へとつながっていったと考える．

5.　まとめ

看護師長の役割課題に着目して開催した 2 回のワークショップは，看護師長の情報活用力向上への意識づけと行動変容に効果があったといえる．今後は情報活用における現場の課題を他施設で共有できるようなｅラーニングの環境を検討していきたい．

謝辞

本研究にあたりご協力を頂きました済生会茨木病院　田中典子看護部長に感謝申し上げます．なお，本研究は，本研究は JSPS 科研費 25463382 の助成を受けたものである．

参考文献

(1)伊津美孝子，真嶋由貴恵，前川泰子，嶌田聡：ｅラーニングを活用した新人看護師教育方法－中間看護理者の人材育成の現状と課題－,教育情報システム学会研究報告, Vol.26, No.1, pp.77-80(2011)
(2)伊津美孝子，真嶋由貴恵：看護師長の情報管理及び活用状況の実態(インタビュー調査より)，第 15 回日本医療情報学会看護学術論文集, pp.4-7 (2014)
(3)伊津美孝子，真嶋由貴恵：看護師長の看護情報管理の現状と教育的課題，教育システム情報学会第 4 回研究会報告，Vol.29, No.4, pp.19-22(2014)
(4)伊津美孝子，真嶋由貴恵：看護師長の看護情報活用能力向上に資するｅラーニング開発の実態調査，第 9 回医療系ｅラーニング全国交流会講演要旨集，pp.20-21(2015)
(5) 堀公俊，加藤彰:ワークショップデザイン――知をつむぐ対話の場づくり（ファシリテーション･スキルズ），日本経済新聞出版社(2008)